

山吹城跡

石見銀山は、1527 年に発見されてから 17 世紀初頭まで、戦国大名に支配されていました。

銀山は、武家間の同盟や対立が絶え間なく移り変わるこの時代に、何度もその持ち主が変わりました。これらの戦いの中心となったのが、標高 414 メートルの要害山の山頂に建っていた山吹城です。城は大内氏が 1530 年代初頭に築いたもので、非常に狭い頂上を平らにし、既存の要塞を転用して、櫓を備えた長方形の天守を建設しました。

城は堀切と階段状になった要塞に囲まれ、天守までの急な小道に沿って攻撃を阻止する高い城壁やその他の障害物がありました。

山吹城からは、銀山と、元の活動の中心地である山内集落、そして日本海の港、鞆ヶ浦への道を何にも遮られることなく眺めることができました。

そのため、山吹城を支配することが銀山支配への鍵となっていました。敵対する尼子氏と小笠原氏が何度か攻城しましたが、1562 年まではいずれも長きにわたる覇権を手にするできませんでした。

1562 年には、毛利氏が石見銀山の完全支配を手にし、山吹城をさらに要塞化しました。山吹城では大きな戦いが繰り返されることはなく、石見銀山は、その 3 年後には徳川氏の旗の下に全国を統一し、1867 年まで日本を支配していた幕府を創設した徳川氏に占領されました。新政府は大森地区に支配の中心を置くことにし、山吹城は徐々に廃城となっていきました。

今日では、要害山周辺には石積みの土台と城壁の名残のみが残っています。主郭の跡地は自然に戻っていますが、山頂の砦も、探す場所さえわかればそのいくつかを確認することができます。この頂上からは、美しい海岸線を見ることができます。鞆ヶ浦道の起点からは、約 1 時間ほどの登山ですが、登山道の一部区間は登ることが難しいので注意が必要です。